

# 「魅力ある生涯学習事業をめざして」

## －伊奈町の生涯学習の推進を通して－

茨城県筑波郡伊奈町立伊奈中学校

教諭 和田 雅彦

### 1. 主題設定の理由

我が国の社会情勢は、少子・高齢化の進行や地球規模での環境問題の深刻化、IT技術の飛躍的な進展など急速に変化しており、それに伴い個人の価値観も多様化するなど、子どもたちを取り巻く環境は大きく変わってきている。学校においても平成14年4月から実施された完全学校週5日制及び新学習指導要領の下で、自ら学び自ら考える力の育成を目指した「生きる力」を育むことが大きな課題となっている。

本県でも、「生きる力」を育成するため、「いばらき教育プラン」に基づき「確かな学力の向上」と「豊かな心の育成」を大きな柱とし、各種の施策を推進・展開しているところである。

私は、平成14年4月から3年間、社会教育主事として、伊奈町の教育委員会生涯学習課に派遣され、「学校を外から見ると」という願ってもない素晴らしい研修の機会をいただくことができた。しかしながら伊奈町では、私が赴任した平成14年度に予定されていた児童生徒を対象とした生涯学習課の事業はやや魅力に乏しいようにも感じられた。学校週5日制対策事業を例にあげると、開催される講座は囲碁・将棋・造形の3つだけであり、各講座20名、合計60名募集のところ、将棋と造形は定員に満たず、参加者は講座全体でわずか42名にすぎなかった。

そこで、この停滞気味の状況を改善し、町全体を活性化させることを自らの第一の課題と捉え、本主題を設定した。

### 2. 研究のねらい

たくさんの方が企画に集まり、参加者がその企画に十分満足する。そのような魅力ある生涯学習事業を企画運営することで町全体の発展に貢献していくことをねらいとして実践研究を行う。

しかし、何をもちえて魅力ある事業と呼ぶのか、このことについては意見の分かれるところである。これまでの講座に関して伊奈町では、申し込んだもの実際には参加しない、あるいは欠席が多いという反省が挙げられている。このことから今回の研究では、内容の充実はもちろんのこと、参加率が8割を超え、参加してよかったという意見も8割を超えるものを魅力ある事業と定義したい。アンケートなどを積極的に実施し、また伊奈町全体で取り組む行政評価システムを利用することで客観的に主題にせまりたいと考える。

### 3. 研究の仮説

#### 〈仮説1〉住民のニーズ

事業を企画する段階で、町住民の参加者のニーズを的確にとらえることができれば、魅

力ある生涯学習事業となるであろう。

#### 〈仮説2〉地域の協力

事業の実際において、地域の協力を得ることができ、さらに優れた指導者を確保することができれば、自ずと魅力ある生涯学習事業となるであろう。

#### 〈仮説3〉関係機関との連携

事業を行う上で、公民館や図書館、保健センターなど町の施設や他市町村、さらには県南生涯学習センターやその他の県の施設との連携を深めることができれば、内容の充実した質の高い事業が展開できるであろう。その充実した内容と質の高さが魅力ある生涯学習事業の根幹となるであろう。

### 4. 基本的な考え方

私は、これまでに小学校を3校、中学校を1校経験しているが、派遣先の伊奈町は教鞭を執ったことがなく、私にとって初めての地であった。

そこで、まず、伊奈町を知ることから始めようと考えた。その上で、伊奈町が抱える様々な課題を見つけ、住民のニーズに合った事業を一つ一ついねいに検討し、一つでも多く魅力ある企画を実現させていこうと考えたのである。

さらに、県立中央青年の家で行なわれた新任社会教育主事研修会(平成14年7月19日)で学んだように、住民のニーズだけ、つまり、人気があり人集めがしやすいものだけに偏るのではなく、今何が必要なのか、何を伝えたいのかも広く考え、これまでの枠にとらわれない新しい企画を練っていくことも大切だと考えた。

### 5. 研究の内容と方法

研究の内容は、次の3点である。

- (1) 仮説1をふまえ、地域のニーズに的確に合った事業の企画と実践
- (2) 仮説2から、地域との連携を図り、企画した事業にできるだけ地域の指導者を取り入れる試みを行った実践
- (3) 仮説3から、町や県の様々な施設を利用するとともに、茨城県県南生涯学習センターとの連携を図った事業の実践

研究の方法は、まず具体的な企画を立て、検討を重ねた上で実施運営し、その後参加者のアンケートから事業の課題や成果を考察することとする。また、伊奈町独自の行政評価システムを用い、具体的に評価反省を行う。

### 6. 研究の実践

#### (1) 伊奈町の概要(位置及び沿革)

伊奈町は茨城県の南西部に位置し、北に筑波山を望み、北東に西谷田川から牛久沼、南西には小貝川が流れる平坦な田園地域と東側に張り出した台地状の樹林地域から構成されている面積約46km<sup>2</sup>、人口2万5288人(平成18年1月1日現在)の町である。

江戸時代(1625年・寛永2年)に、関東郡代・伊奈半十郎忠治が幕命によって治水工事を起こし、谷原3万石とも言われる耕地を作り出し、昭和60年には町制施行によって今の伊奈町ができあがった。

都心から40km圏内という地理的条件に恵まれており、常磐自動車道を使えば都心から約1時間ほどで伊奈町に到着することができる。さらに、平成17年8月24日に「つくばエクスプレス」が開通し、秋葉原までおよそ40分でアクセスできるようになったため、さらなる発展が期待されている。

伊奈町では、水海道市・谷和原村との3市町村による合併が進められていたところであるが、平成17年1月28日に谷和原村で行われた第12回合併協議会において水海道が離脱し合併協は解散となった。現在は伊奈町と谷和原村の2町村合併をめざしており、平成18年3月27日には「つくばみらい市」となる予定である。

## (2) 伊奈町の生涯学習について

近年、多くの人々が「心の豊かさ」や「生きがいのある暮らし」を求めるなか、伊奈町においても全町民を対象とした生涯学習のための環境づくりや、その内容の充実に努めてきた。

平成5年からは生涯学習推進本部を設置し、本町における生涯学習の推進に向けて体制を整え、各生涯学習施設の整備や学習機会の充実にめざすとともに、生涯学習に関する情報収集とその提供に取り組んでいる。今後、余暇時間の増大、高齢社会の到来、生活水準の向上等を背景として、生涯学習に関するニーズがますます多くなることが予想され、しかもより一層多様化していくことが考えられる。

## (3) 生涯学習を推進するために

### ① 現状

伊奈町においても、少子高齢化や国際化、IT技術の急激な進歩など、大きな社会の変化が否応なく進み、地域の連帯感の減少や人間関係の希薄化が進んでいるところである。

そのため町では、一人一人がそれぞれに豊かな生活を営むため「生涯学習推進大綱」を策定し、「うるおいと活力に満ちたまちづくり」を目標に生涯学習を推進している。

生涯学習施設としては、中央公民館の他、総合福祉施設「きらくやまふれあいの丘」や平成15年12月1日に開館した「谷井田コミュニティセンター」がある。

また伊奈町には6つの小学校2つの中学校があり、児童数は1332人生徒数は658人合計で1990人の児童生徒が在籍している。その他2つの町立幼稚園と県立の伊奈高等学校、伊奈養護学校がある。(平成16年5月1日現在)

### ② 課題

本町においては前述のことを踏まえ、住民の様々な学習ニーズに応えるため、全ての社会教育施設において、平日や日中の時間帯に加え夜間や休日の開催にも進んで取り組み、各種講座や事業を展開しているところである。

今後は、さらなる内容の充実と質的向上を図ることが一番の課題であると考えられる。

### ③ 伊奈町の生涯学習推進目標について

第3次伊奈町総合振興計画では、町の生涯学習推進目標について次のように書かれている。

テーマ 「うるおいと活力に満ちたまちづくりをめざして」

また、より具体的なサブテーマとして、次のことが記されている。

サブテーマ 「いつでもどこでも学べるひとづくり・まちづくり」

## (4) 実践事例

前述の生涯学習推進目標をふまえたうえで自分が中心となって関わってきた伊奈町の生

涯学習事業について、その主なものについて事例を挙げて説明したい。

まず最初に、茨城県の2分の1補助事業の「地域で育てる元気っ子体験村事業」についてである。

仮説1に記したように、企画する段階で住民のニーズを的確にとらえることが魅力ある事業には不可欠であると考え、平成14年6月24日に第1回めのアンケートを実施した。

折しも私の赴任した平成14年は、完全学校週5日制が実施された年である。この機会を逃さず、町内の全ての小中学校に協力を願いアンケート用紙を配布してもらい、児童生徒の週末の実態や保護者の要望を把握することに努めた。

その結果、小学校では連休になった週末、小学生は約8割が「外で遊ぶ。」と答えており、中学生は約7割が「部活動」と答えている。保護者の自由記述では、小中学校ともに「友だちがいるときは外で遊ぶが、一人のときは家でゲームをしている。」や「家の中でごろごろしている。」「休日が増えるとテレビを見たりゲームをする時間が長くなってしまって困る。」というものが多くみられる。また多くの学校の保護者から「子どもたちだけで気軽に参加できる催し物があるといい。」や「休日に子どもと一緒にできる学習やレクリエーションを教えてほしい。」というような要望があった。中でも「自然体験ができる機会を増やしてほしい。」や「自然にふれあったり環境問題を考える場を提供してほしい。」という記述が多く、これまで町が行なってきた「囲碁講座」や「将棋講座」「造形講座」とは違った新しい事業の企画が急務であることを感じた。

そのようなとき、県の補助事業「地域で育てる元気っ子体験村事業」のことを知り、さらに社会教育主事会で一緒に研修を受けた他市町村の先輩方や県教育庁の社会教育主事の方々の話を聞くうちに、この事業はまさに伊奈町住民のニーズに合った、しかも子どもたちの心をたくましく育てることのできる素晴らしい事業だと考え、ぜひとも取り組んでみたいと思ったのである。

しかしながら、14年度の事業は全て前年度に決定されており、派遣1年目から取り組むことはできなかった。

一人企画を練り、同僚に話し協力を得て、生涯学習課長に実施できるかの相談をした。そこからまたさらに企画の検討を行ない、何よりも子どもたちの安全が確保できる見通しをつけた上で町教育長に新規事業の企画を話したのは派遣の2年目になってからであった。

町で40万円、県の補助が40万円、受益者負担が20万円合わせて100万円の事業であるが、新規に立ち上げることの困難さを身をもって知ることとなった。

予算のめどが立ったのは平成15年、実施は平成16年の夏に決定した。

#### 【伊奈町わくわく元気っ子体験村について】

- ① 事業名 「地域で育てる元気っ子体験村」
- ② 補助事業者 伊奈町
- ③ 補助率 補助対象経費の1/2の額
- ④ 目的 (資料P12事業概要を参照)
- ⑤ 主催 伊奈町わくわく元気っ子体験村実行委員会(事務局：生涯学習課)
- ⑥ 実施期間 平成16年8月3日から平成16年8月9日まで(6泊7日)
- ⑦ 参加者 伊奈町立小学校の4・5・6年生児童及び町立中学校の生徒

男子 15 名 女子 15 名 合計 30 名

・ 30 名募集のところ、83 名の応募があり、抽選によって参加者を決定した。

(直前の体調不良により 5 年生女子 1 名が欠席したため 29 名で実施した。)

⑧ 参加費用 7000 円 (食費・保険料等)

⑨ 主な活動内容

- ・ ネイチャーゲーム
- ・ 星空観望会
- ・ 植物観察体験学習
- ・ 機織り体験学習
- ・ フォークダンス
- ・ 茶道体験学習
- ・ 伊奈に伝わる昔話
- ・ 火おこし体験
- ・ 川下り川遊び体験
- ・ 食事作り
- ・ 素手での魚とり
- ・ 乗馬体験 他

⑩ 「元気っ子体験村」実現までの流れ

(ア) 企画に際して

なぜ「元気っ子体験村」か。

住民のニーズに応えるため、本事業に取り組むこととしたわけだが、実施が近づくにつれて悩んだことがある。

なぜ元気っ子体験村なのか。この事業が子どもたちに必要だと保護者にはっきりと説明できる具体的根拠はどこにあるのだろうかと考えたのである。

そのようなとき、同じ派遣の仲間である河内町教育委員会生涯学習課の大森泉氏より、「生活体験・自然体験が日本の心を育む」(平成 11 年生涯学習審議会(当時))の資料を見せていただいた。

これは、「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」(平成 10 年文部省(現文部科学省)実施)の結果をまとめ、分析したものであり、そこには子どもの健全育成と体験活動との高い相関関係が示されていたのである。

それ以前から中央教育審議会が「生活体験自然体験の機会増加の必要性」が示されてはきたが、具体的な数値をもって明確にされたのはこれが初めてであるという。(河内町派遣社会教育主事大森泉氏のレポートから)

また、全国子どもプランには次のような文言が記されている。「長期の自然体験は、子どもたちにとって自然の厳しさや恩恵を知り、動植物に対する愛情をはぐくむなど、自然や生命への畏敬の念を育てたり、自然と調和して生きていくことの大切さを理解する貴重な機会となる。さらに、自然の中での組織的な活動は、きまりや規律を守ること、友達と協力することの大切さや、自ら実践し創造する態度を学ぶことができるなど、まさに総合的な学習の機会といえることができる。」

これらのことをふまえ伊奈町では、前述の「うるおいと活力に満ちたまちづくり」の一環として、また「いばらき教育プラン」にもある「個性と創造性に富むこころ豊かな人づくり」をめざし、「地域で育てる元気っ子体験村事業」に取り組むこととしたのである。

(イ) 学習プログラムの検討

体験活動が子どもたちの健全育成に重要だということはわかったが、学習プログラムを決定する段階になって、どのような活動が必要なのか、また、この伊奈町をはじめとする近隣地域でどのような体験活動が可能なのかが問題となった。

特に仮説 2 で記したように、地域の協力を得ることができるよう活動と、その活動に最適の指導者を探すことに一番の重点を置くこととして、地域の学習資源を一から見つめ直し、調査開拓することから始めたのである。

#### (ウ) 地域の学習資源

「今の子どもたちに必要な活動」については、茨城県からの文書「平成16年度地域で育てる元気っ子体験村事業」に係るリーダーボランティア研修会実施要項の中にヒントがあった。

第1は野宿や自給自足を体験する自然体験活動である。(キャンプ等の野外活動)

第2として、炊事・洗濯・清掃・買い出しなどの生活活動を通じた異年齢との交流体験、第3には自分たちが生活している地域を知る活動、第4は農業体験など地域で働く活動、そして第5として高齢者をはじめとした地域の人との交流体験活動である。

次に、これらの活動は可能なのか、できるとすれば場所はどこがいいか、地域の協力は得られるのかという3つの観点で、再度企画を練り直した。

伊奈町でどのような活動ができるかを自分なりに考えるとともに、様々な人と話し合うことで、学習プログラムの輪郭が見えてきた。教育委員会生涯学習課の職員をはじめとして、役場や公民館、図書館の職員、小中学校の先生方、地域のお年寄りやボランティアの方々、さらには県南生涯学習センターの職員や県派遣社会教育主事の友人たちに直接話し、語り合い、意見交換することでたくさんのヒントをもらうことができた。そしてその結果、次のような体験活動が候補に挙がった。

##### ・食事作り

飯盒炊爨、イタリア料理、カレーライス、流しそうめん、食材の自給自足

##### ・自然体験

ネイチャーゲーム、星空観察、木を使った工作、川遊び、カヌーでの川下り、乗馬体験、化石掘り、土器拾い

##### ・農業体験

農作業体験、牧場体験

##### ・生活体験

炊事、洗濯、清掃、薪割り、火おこし、機織体験、ドラム缶風呂、ツリーハウス作り

##### ・公民館体験活動

フォークダンス、茶道、陶芸、拓本、舞踊、太鼓、コーラス、演劇、ニュースポーツ等

以上をもとにして、学習する場所を探し確保した。そして、各学習プログラムに適した指導者をできるだけ身近なところから探し出し、依頼し、全ての時間を調整してようやく7日間の活動プログラムの原案を作成したのである。

主な活動場所は、伊奈町立公民館をはじめ伊奈町総合福祉センターきらくやま、谷井田コミュニティセンター、郷土資料館「結城三百石記念館」、小貝川及び小貝川河川敷、茨城県立伊奈高等学校合宿所など、いずれも身近な地域に決定した。

活動は、雨や台風による急な変更にも対応できるよう余裕をもって作成し、指導者の方にもその旨を伝えておいた。また、学習プログラム変更の際必要となる移動の手段として、町の福祉バスを7日間全て貸し切りとした。

#### (エ) 事業の実際

1週間の宿泊学習である「元気っ子体験村事業」を実施するにあたって、一日一日に名

前をつけた。

- 1日目 「出会いの日」
- 2日目 「ふれあい体験の日」
- 3日目 「探検体験の日」
- 4日目 「生活体験の日」
- 5日目 「自然体験の日」(資料①)
- 6日目 「まとめの日」
- 7日目 「別れの日」



(資料①)川遊びの様子

このことは毎日の課題を明確にするとともに子どもたちにとって親しみやすく、記憶に残る1週間となったようである。

事後アンケートと一緒に提出してもらった児童生徒の作文には、「涙が止まらなくなった」「また、来年も参加したい」「みんなにもう一度会いたい」「みんな、ありがとう」などのことばが書かれていた。

特筆すべきは、男子も女子もたくさん子どもたちが、「自分も大きくなったらわくわく元気っ子体験村のボランティアリーダーになりたい」と言ってくれたことである。

#### (オ) 事業の評価

##### (a) アンケート結果

伊奈町わくわく元気っ子体験村での生活中に「家に帰りたい(家族に会いたい)と思いましたが。」との質問に一度も思わなかったという子が29人中20人(68.9%)いた。

「自分のことは自分でやれましたか」の質問には29人中20人(68.9%)が自分でやれたと回答している。また、「参加する前と比べて、自分から進んで行動できるようになりましたか」の質問では「とてもそうなった」29人中20人(68.9%)と「少しそうなった」29人中9人(31.1%)を合わせると全員子どもたちが「自ら進んで行動できるようになった」と答えている。

さらに、「またわくわく元気っ子体験村のような事業があったら参加したいと思いますか。」との質問には、29人中28人(96.6%)の児童生徒が次回もぜひ参加してみたいと答えている。

##### (b) 事業成功のポイント

参加した児童生徒はもちろんのこと、保護者やスタッフ、主催者の中からも「素晴らしい事業だった」という評価のことばが出たこの「伊奈町わくわく元気っ子体験村」だが、事業成功のポイントは次の3つであると考えられる。

第1に子どもたちの健康管理である。

計画段階から町の保健センターと連絡をとりあい、子どもたちの健康面、衛生面に何が必要かを話し合いリストを作っていた。また、事業に際しても毎日1名から2名の保健師を同行し、1日2回「朝と夕」のきめこまやかな健康観察をすることで、万が一の場合に備えることができた。

実際、4年生の男子1名が活動の5日目に熱を出し心配されたが、そのときも保健師による適切な処置のおかげで大事にならずにすんだ。その男の子は一晩家に帰ることになったのだが、次の日にはすっかり元気になって母親に連れられ、朝8時には再び参加することができた。そして6日目の学習プログラムである河川敷の清掃や乗馬体験も元気いっば

い行うことができたのである。(資料②)

適切な判断と処置がいかに大切かを知るとともに、連携して事業にあたった町保健センターの担当者から、「できうるかぎり最高のサービスを提供します」と言ってくれたことにあらためて感謝したい。

第2には、夏の一番暑い時期なので、熱中症の予防対策として毎日の水分補給に留意したことである。

知り合いの医師から「熱中症の予防には麦茶が一番いい」と指導を受け、1人2リットルの麦茶を人数分、毎日用意した。

そのとき、大きな桶やバケツなどに大量に作って子どもたちに「さあ、自由に飲みなさい」と言っても、子どもたちはなかなか飲まないものである。そして、「具合がおかしいな」と気づいたときには、もうすでに熱中症になっている場合があるので、面倒でも麦茶は一人一人の水筒に毎日入れること。昼食のときや活動の途中でも、足りなくなったらその都度補給すること、というアドバイスを受けスタッフ全員がそのことについて共通理解し、いつでも水分補給ができるよう準備を心がけた。

第3にすばらしいボランティアリーダーとの出会いである。

この事業に適した地元の指導者として当初、伊奈町の「高校生会」の協力を予定していた。他の事業などでも関わりをもち、彼らの子どもたちに対する対応の良さも知っていたので、まさに適任だと思い、およそ1年前から代表者とコンタクトをとり事前の約束を取り付けていたのである。しかし、事業がはじまる2ヶ月前の平成16年6月に、「他の行事と重なってしまい参加できない。」という連絡をうけた。もう募集のちらしも作り終わり、配りはじめようという矢先のことである。

非常に失望するとともに子どもたちと一緒に活動してもらう一番大切な「リーダー」の確保をどうするかが急務となった。

そのとき協力してくれたのが、伊奈町社会福祉協議会であった。「高校生会」がキャンセルしてきたことを告げると、以前伊奈町の高校生会に在籍しており今は大学生となっている何人かに早速連絡をとってくれたのである。

その結果、急な連絡にも関わらず6人の「高校生会」OBが「伊奈町わくわく元気っ子体験村」に参加してくれることになった。また、私が町の成人式の事業も担当していたことからその実行委員長をしてくれた大学生も協力してくれることになり、他に伊奈町の小学校から社会人TTが1名、町生涯学習課からも若い臨時職員を1名お願いすることで、最終的には当初予定していた9名のボランティアリーダーをなんとか確保することができた。

1ヶ月前の7月10日には事前研修を行い、この事業に関する意義やリーダーとしての役割、そして注意点などを確認することができた。このとき本事業のメインでもある「カヌーによる川下り」と「川遊び」の際の注意点(レスキュー訓練)も現場に行き行って実際に行い当日の活動に備えることができたのである。

参加してくれたボランティアリーダーたちは、ほとんどが保育士や教員志望であった。



(資料② 元気を回復し乗馬体験をする男子)



そのためか、事前研修も含めて1週間の体験活動に、非常に積極的且つ献身的に取り組み、子どもたちのよき理解者となってくれた。

一週間毎日、子どもたちの健康や精神状態に気を配り、寝食を共にするだけでなく一緒に笑い一緒に泣くといったこれ以上はないと思えるほどの頑張りを見せてくれたのである。

なんと彼らは事業終了後の9月、一緒に過ごした「元気っ子」たちに会うために、町の全部の小学校の運動会を自転車で訪ねて回ったというのである。再会した子どもたちが大喜びしたことは言うまでもない。

この事業が大成功であった一番の要因は、9人のすばらしい「リーダー」がいてくれたこと、そして、「リーダー」たちの持つ「若い力」が子どもたちに伝わり「感動」を共有することができたことであると断言できる。

#### (c) 児童生徒及び保護者の感想

感想は、「川遊びはとてもたのしいことがわかった」や「走る馬に乗ったのは初めてだった」「自分も大きくなったらリーダーになりたい」など。

子どもたち一人一人の熱い思いが込められており、この事業を実施することができて本当によかったと、今さらながら実感している。また、保護者の感想には「ぜひ来年も継続してほしい。」との声が多数あり、嬉しさと同時に、このニーズに応えていくためにはどうすればよいか、新たな課題ができたともいえる。

#### (d) わくわく元気っ子体験村の考察

この事業でめざしたものは、「親元を一定期間離れ異年令による集団生活を行い、その中で様々な活動を体験することによって自主性・協調性・忍耐力・社会性を高めること」である。

参加者の事後アンケートからも「自分から進んで行動できるようになった」29人中29人(100%)「友達と仲良く協力することができるようになった」29人中29人(100%)「がまんする力がついた」29人中28人(96.6%)など、自分の成長に対する自覚が数値にも大きく表れている。

また、参加者の感想の中にも家族やスタッフ、そして大学生のボランティアリーダーに対する感謝の気持ちが表れているものが多く見られた。

このことから前述の目標はほぼ達成できたと考える。そして、これらの経験が心の中で大きく育ち、やがて最終目標である「心豊かにたくましく生きる力を育てる」につながるものと信じている。

もうひとつ、すばらしい収穫があった。

それは、子どもたちにフォークダンスや茶道、機織り、食事作りなどを教えてくれた指導者たち、町の文化協会の方々のことである。

今回「伊奈町わくわく元気っ子体験村」の指導ということで、高齢の方も含めてたくさんの町住民の方々が子どもたちと一緒に様々な活動を行ったわけだが、ほとんど全ての方から「楽しかった。」「子どもたちと一緒に踊るのが、こんなに楽しいとは思わなかった。」「熱心に聞いてくれるのがうれしかった。」「またこのような機会があったら一緒にやりたい。」との感想をいただいた。

このことは、「伊奈町わくわく元気っ子体験村」という特別な事業でなくとも、町の小中学校との連携で簡単に実現できることであると思われる。非常に価値のある生涯学習環

境（指導者）が、町のこんな身近なところに埋もれており、きっかけさえあればたくさんの方が子どもたちの体験活動に協力してくれるということがわかったことは、自分にとっても大きな収穫であった。

小中学校と地域を結ぶネットワークができれば、そしてそこにコーディネートをする者がいれば、地域の教育力は大きく向上するのである。

#### （５） その他の事例

次に、私がこの３年間で取り組んだ「元気っ子体験村」以外の事業の中で主なものについて説明したい。

##### ① 社会教育に関すること

青少年健全育成事業『親が変われば子どもも変わる運動』について

##### （ア）趣旨

近年、青少年による凶悪事件が多発するなか、いじめ、不登校、性をめぐる問題、薬物乱用など、青少年の問題が深刻化し大きな社会問題となっている。

これらの問題状況の大きな要因として、親をはじめ大人・社会の歪みが青少年に大きく影響していると指摘されている。そこで青少年育成茨城県民会議では、親や大人が改めて自らを振り返り姿勢を正していくことを願い、青少年の心を育てるキャンペーン「親が変われば子どもも変わる運動」を県民運動として推進することとしたのである。

##### （イ）主催 伊奈町青少年を育てる会

##### （ウ）事業について

実際の担当は、町教育委員会生涯学習課の同僚直井仁志主幹であるが、講師の手配そして内容について指導助言を行った。（社会教育法第９条の３社会教育主事は社会教育を行う者に専門的技術的な助言と指導を与える。）

具体的には、青少年問題についての講演会を開き、その中で思春期理解について取り上げることを提案した。講師には「十代の性と健康」指導医であり、上級思春期保健相談士でもあるつくば国際短期大学講師の和田由香医師にお願いした。

以上のことから平成１４年度の「親が変われば子どもも変わる運動」の講演会を行ったわけだが、講演会が非常に好評だったため、平成１５年度も和田由香氏にお願いしたいとの声が多く聞かれた。そこで平成１５年も同様の企画をしたのだが、前年と同じではなく、一つ工夫を加えるよう助言を行った。それは、講演会の中に、「子どもと大人によるパネルディスカッション」を取り入れるというものである。また、和田由香氏だけでなく、日本の性教育の第一人者、千葉大学教育学部の名誉教授でもある武田敏先生にも講演していただくことで、内容の充実とさらなる質的向上をも図ったのである。

さらに１６年度は、文部科学省社会教育の革新に関する検討委員であり茨城県男女共同参画審議会委員でもある茨城大学の長谷川幸介先生に、「子どもの力と家庭・地域社会」という演題で講演をお願いした。独特のユーモアを交えた軽妙な語りと鋭い視点、そして子どもたちや地域を見つめる温かい眼差しで、集まった参加者の心をとらえていた。講演後参加者から、もっと話を聞きたいので、長谷川先生の連絡先を教えてほしいという電話が何度もあったほどである。

##### ② 講座に関すること

平成１４年４月から完全学校週５日制の実施に伴い伊奈町でも、週末の時間を生かし児童

生徒がゆとりの中で主体的に学び考えることのできる場を提供することが大きな課題となってきた。

前述のように平成14年度の子どもたちの講座は、「囲碁」「将棋」「造形」の3つであり、参加児童数は全体でわずか42名、しかも毎回欠席者が多数おり、とても魅力ある事業とは言えない状況であった。

平成15年度からは、もっと子どもたちが意欲的に活動できるものを考え、次のような講座を新規事業として提案したのである。名前も学校週5日制対策事業ではなく、親しみやすいよう「わくわくシリーズ」と命名した。

その結果、参加者数も飛躍的に伸び、平成15年度の講座参加者は157名、平成16年度は150名、参加率はいずれの年度も80%をこえ、講座満足率も87%を達成することができたのである。

(ア) わくわくシリーズについて

ここでは、具体的な事業名とその目的について記載することとする。

(a) 平成15年度

事業名【わくわく国際交流講座】

目的

- ・完全学校週5日制の実施に伴い、週末の時間を生かし児童生徒がゆとりの中で主体的に学び考えることのできる場を提供する。
- ・簡単な英語にふれることから始め、英語のあいさつや自己紹介、英語で行うゲームなどを通してやさしい英会話を身につけたり、外国に詳しい方のお話を聞いたりしながら国際交流を深める場とする。(資料③)

事業名【わくわくパソコン講座】

目的

- ・週末の時間を生かし、児童生徒がゆとりの中で主体的に学ぶことのできる場を提供するとともに、近年発達が目ざましいIT機器に触れ、楽しみながらコンピューターやデジカメの操作を体験する。
- ・伊奈町で導入しているパソコンソフトの「スタディノート」を用い、絵や写真を取り込んだお便りや壁新聞などの作成を体験する。

事業名【わくわく女子サッカー講座】

目的

- ・ボールを使った運動を通して、健全な心身の健康を育む。
- ・女子にはまだ、なじみの少ないサッカーというスポーツを体験することによりその楽しさを知る。(資料④)

事業名【わくわく親子歴史講座】

わくわく親子歴史講座については、親子で20組、40名を募集したが、実際には3組7人しか申し込みがなく開講できなかった。どうすればたくさんの子どもたちに来てもらえるか、魅力のある講座とはどのようなものなのかをもう一度考える良い反省材料となった。

(b) 平成16年度

事業名【わくわく国際交流講座】



(資料③ わくわく国際交流講座の様子)

事業名【わくわく女子サッカー講座】



(資料④ わくわく女子サッカーの様子)

上の2つについては、16年度も引き続き行うことが決定した。どちらも非常に好評で、国際交流講座は募集定員を10名増やし50名、女子サッカーは定員を昨年の倍の60人に増やすこととした。女子サッカーについては、希望者が予定の60名をさらに10名以上も超えてしまったので、急遽、指導者の数を増やして対処したほどである。(資料 P97)

事業名【わくわく子ども歴史講座】

昨年、希望者が少なかったため開講できなかった「わくわく親子歴史講座」の反省を踏まえ、16年度は子どもだけの歴史講座を企画した。

伊奈町は、その名前の基となった伊奈半十郎忠治をはじめとして、日本人としてただ一人世界地図上に名前を刻んだ間宮林蔵、種なしぶどうの生みの親・黒澤栄一、などたくさんの歴史的人物と関わりが深い町である。また、板橋の不動院(清安山願成寺)には国指定文化財の不動明王が、小張と高岡には国指定無形民俗文化財の綱火があり、他にも各地区を少し歩いただけでたくさんの石仏石塔を見ることができる。このような町の歴史の豊かさ・すばらしさに目を向け、子どもたちに伝えていくことを全面に出して昨年の企画を1から練り直した。

しかし、結果は本年度も小学生が12名、その保護者2名、町の小学校から社会科の教員が2名、合わせて16名と、他の講座に比べて希望者が極端に少なかったのだが、内容には

自信があり、また、少人数で行うことのメリットと、次年度継続して行っていく場合のこと、さらには研修で習った「人気がなくとも企画すべき大切な講座」はまさにこの講座であると考え、上司と相談し実施を決定した。実際に土器のかけらを見つけたり、石仏を調べて拓本にとったり、板橋の不動院にある三重の塔の中に入って芯柱（しんばしら）と黄金色に輝く仏像を見せてもらったりと、非常に内容の充実した講座となった。参加した子どもたちが郷土を愛し、歴史を好きになるきっかけとなってくれればと願いながら、夢中で講座を行った。(資料⑤)



(資料⑤拓本)

### 事業名【わくわく赤ちゃんふれあい教室】

事業開催については、次のように考えた。

・青少年を取り巻く環境は年々変化し、今日の科学技術の発展や国際化・情報化に伴う急激な変化は、人々のライフスタイル、価値観を変えつつある。近年、青少年の心身の健康に関するトラブルが大きな社会問題となっており、喫煙、飲酒、薬物乱用、望まない妊娠、性感染症など、十代の性と健康に関する様々な問題が指摘されており、このことは、本町においても例外ではなくなっている。これらをふまえ、町内の中学生を対象に、生命の尊さを理解するきっかけとなる場を設定したいと考え、町保健センターの協力により「わくわく赤ちゃんふれあい教室」を企画した。(資料⑥)また、前述の様々なトラブルを未然に防ぐための予防に関する健康教育(和田由香医師によるピアカウンセリングの講習会)も併せて行い、21世紀を担う青少年の健やかな成長を地域全体で支援していきたいと考えた。(資料⑦)



(資料⑥わくわく赤ちゃんふれあい教室の様子)



(資料⑦和田由香医師によるピアカウンセリングの様子)

### (イ) 県民大学移動講座

【県南生涯学習センターとの連携】

(a) 平成 15 年度

「安心な食事と健康」(資料⑧)

食品総合研究所



(資料⑧県民大学)

(b) 平成 16 年度

「そうだったのか！ 現代史」を読む

茨城大学 長谷川幸介先生

上記のように子どもたちを対象にした「わくわくシリーズ」以外にも、町民を対象とした講座を積極的に企画立案した。特に仮説 3 にも記したように、県南生涯学習センターと積極的に連携を図り、茨城県弘道館アカデミーの一つでもある県民大学の移動講座を平成 15 年 16 年と 2 年連続で伊奈町で行えたことはなかなか土浦や水戸などに出かけることの少ない、したがって県主催の講座はほとんど受けることのできない伊奈町住民のニーズにも大きく応えることができたと考えている。

### ③ 伊奈町社会科作品展について

わくわくシリーズのなかの「わくわく子ども歴史講座」を企画したとき一つ思ったことがあった。それは、講座で仕上げた社会科作品を公民館などに展示して、より多くの町の方々に見ていただけないだろうかということである。

また、以前、小学校の担任でいたときに強く感じていたことの一つに、夏休みの作品展がある。

出来不出来は別として、子どもたちは夏休みに自ら課題に取り組んだものを作品として 9 月に学校に持ってくる。そして、その多くは絵画や理科の作品展などに出品される。

しかしどこにも出すことができない作品も多く、それらは頑張って仕上げてきたにも関わらず、教室にしばらく飾っておかれ、少数の人の目にふれるだけであまり賞賛もされず家庭に返されてしまうのが学校現場の現実なのである。

私は伊奈町に赴任したときから、それらの作品を教育委員会で預かり、そしてどの作品に対しても賞賛の場を設けてあげることはできないだろうかと考えていた。

1 年目は予算が終わってしまった後なので実現できなかったが、2 年目はなんとか 10 万円を新規予算として計上してもらい、この作品展の開催にこぎつけたのである。

実施した結果、予想よりはるかに多くの作品が集まり、うれしい悲鳴をあげることとなった。展示や審査に非常に時間がかかり、生涯学習課の他の職員にも助けていただいた。素晴らしい作品がたくさん集まり、これを伊奈町だけでなく茨城県全体で取り組むことができれば、平成 18 年の「全国生涯学習フェスティバル」においても企画の目玉となりうるのではないかと考えた。

#### ・平成 15 年度の伊奈町社会科作品展

357 作品 のべ参加者 442 人

#### ・県南生涯学習センターフェスティバルへの参加

伊奈のむかし「間宮林蔵と綱火の世界」(資料⑨)

平成 15 年 11 月 8 日と 9 日の両日、県南生涯学習センターのエントランスホールにおいて、伊奈のむかし「間宮林蔵と綱火の世界」と題して展示発表を行った。事前に行った伊奈町社会科作品展から優秀作品 20 点と、間宮林蔵記念館から林蔵の作成した地図のレプリカ、さらに町立歴史館から実際に綱火で使用した人形を展示した。

(資料⑨ 伊奈のむかし)

「生涯学習社会における連携・ネットワークの推進にむけて」

伊奈町教育委員会生涯学習課 和田雅彦

事業名	茨城県県南生涯学習センターフェスティバルへの参加 － 伊奈のむかし － 「間宮林蔵と綱火の世界」
事業主体	茨城県県南生涯学習センター 伊奈町教育委員会生涯学習課
連携・協力機関	伊奈町教育委員会町史編纂室 間宮林蔵記念館 伊奈町立歴史館 伊奈町立小学校及び中学校
<p>1 概要</p> <p>平成14年6月6日「第18回全国生涯学習フェスティバル」の開催地が茨城県に内定した。開催時期は平成18年10月5日から9日までの5日間、参加規模は約100万人である。事業内容は生涯学習に関するシンポジウム・フォーラムや市町村及び学校・企業等のブース方式による展示、公演等となっている。</p> <p>伊奈町でも生涯学習の推進を目指し様々な事業に取り組んでいるところであるが、その取り組みの一つとして平成15年11月8日・9日の両日、茨城県県南生涯学習センターフェスティバルに参加した。間宮林蔵記念館から林蔵が作製した地図を、町立歴史館から綱火で使用した人形をお借りし、センターに展示させていただいた。また、伊奈町の小中学校の児童生徒が作製した社会科作品も併せて展示掲載させていただいた。</p> <p>この事業を通して、伊奈町での生涯学習に対する理解をさらに深め、生涯学習活動への積極的な参加を促進する新たな契機とするとともに、近隣市町村に対しても伊奈町の取り組みを積極的にアピールしていきたい。そして今後もより良い生涯学習社会の実現に努めていきたい。</p> <p>2 成果</p> <p>伊奈町からは生涯学習課だけでなく、町史編纂室の協力も得て展示物に関する解説も行った。伊奈町の文化財・史跡に関するマップや間宮林蔵記念館のリーフレットも用意した200部全てがはげ、林蔵や綱火に関する関心の高さがうかがえた。また、児童生徒の作品を展示することで伊奈町からも多数、土浦まで足を運んでもらうことができた。</p> <p>3 課題</p> <p>文化財を展示する際には、展示するための専用のケースを準備したり、破損しないように細心の注意を払うことが必要である。また、新たに保険をかけるなど、万全の体制で臨むことが必要であると感じた。</p> <p>平成18年の全国生涯学習フェスティバルも視野に入れ、さらに各機関と連携を密にしてより良い事業になるよう継続していきたい。</p>	

上の資料は、平成16年6月17日に県南生涯学習センターで開催された、第1回県南地区市町村生涯学習関連事業連絡協議会で発表を行ったときのレポートである。ここにも記したように、伊奈町では生涯学習課だけでなく、町史編纂室の協力も得てフェスティバルに参加した。町史編纂室木村室長の協力で、間宮林蔵記念館に展示してある1番大きな地図と、実際に「小張松下流綱火」で使用した本物の人形をお借りすることができたのである。また当日は、木村室長に林蔵と綱火を中心とした「伊奈のむかし」の解説もしていただき、大好評であった。間宮林蔵はさすがに知名度が高く、綱火にも多くの関心が集まったため、あらかじめ用意した200部のリーフレットが2日目の午前中にはなくなるなど、充実した2日間であった。

児童生徒の作品もたくさんの人に関心をもっていただき、伊奈町を十分アピールできたと考えている。

一つ課題として残ったのは、このような貴重な文化財を預かるときの町や関係機関の共通の認識をもった体制作りである。

林蔵の地図や綱火の人形など、貴重な文化財を破損しないよう細心の注意を払うことはもちろん、展示するための専用のケースを準備することや、万が一のために保険をかけることも非常に大切だと身をもって知った。

・平成16年度の伊奈町社会科作品展

167作品のべ参加者224人

(作品数及び参加者の減は、中学校の取り組みの減によるものである。)

・学校とのさらなる連携

第1次審査は教育委員会で行い、第2次審査を各小中学校の社会科主任の先生方をお願いすることとした。(学校教育と社会教育の連携)

審査の観点は次の4項目である。

- (a) 動機の明確さ
- (b) 調査の方法
- (c) まとめ方
- (d) 発想・独自性

これらを優-3、良-2、可-1の3段階で評価を行い、最優秀・優秀・優良・努力のそれぞれの賞を決定した。また、全体として取り組みの良かった学校を先生方に挙げてもらい、学校賞も加えることとした。さらに、出展者全員に参加賞を用意したのである。

平成15年度は「第1回社会科作品展」と印刷された色鉛筆、そして平成16年度は、町史編纂室の協力を得て、間宮林蔵が樺太を望む写真入りの下敷きを作成することができた。

(資料⑩)



(資料⑩ 参加賞の下敷きの原案)



#### ④ 各種研修会への参加

伊奈町でお世話になったこの3年の間に、たくさんの研修に参加させていただいた。

特に愛媛県で開催された、「全国生涯学習フェスティバル」への参加は、平成18年の茨城県開催を考える上でまたとない機会であり、様々なヒントと体験を得ることができた。その一つが前述の社会科作品展である。

愛媛県生涯学習センターでは、開催事業として「みて歩き、しらべて回る、えひめの有名人大発見・小中学生のふるさと学習作品展」を行い、700点あまりの作品を展示していた。

伊奈町だけでもおよそ200点の作品が可能であると考えれば、県全体ではそれこそ大変な数の作品ができることになる。それらをうまく展示し、県内外にアピールすることができれば、学校との連携事業ともなり、全国生涯学習フェスティバルの中でも低予算でも魅力ある企画の一つとなるのではないだろうか。その他、以下の研修会に参加し、自分なりに生涯学習に対する見識を深めることができたと感じている。

- ・ 国立教育政策研究所主催実践研究交流会
- ・ 思春期保健セミナー（岡山県）
- ・ 日本思春期学会への加入
- ・ 上級思春期保健相談士の資格取得（千葉）
- ・ 関東甲信越静社会教育大会（山梨県）
- ・ 教育ソリューションフェア（神奈川県）
- ・ 北海道親子ふれあいクルーズ（北海道）
- ・ 茨城県社会教育主事会
- ・ 土浦地方社会教育主事連絡協議会
- ・ 茨城県派遣社会教育主事会研修会
- ・ 茨城県県南派遣社会教育主事会研修会等

## 7. 事業の成果と今後の課題

今回の研究は、学校現場を離れて町の派遣社会教育主事という立場で取り組んだものであるが、わくわくシリーズの企画を通して、中でも3年越しの計画となった「伊奈町わくわく元気っ子体験村事業」の実施とその結果から仮説1が十分立証できたと考える。また、仮説2においても「元気っ子体験村」の事業を通して地域の協力を最大限得ることができ、その結果魅力ある事業になったと思っている。ただ、指導者の確保に関しては、「高校生会」に土壇場でキャンセルをされてしまい、どうなることかと思ったが、代わりに参加してくれたOBたちが予想以上にすばらしいリーダーであったため、図らずも仮説2で示した通りとなった。

仮説3については、「元気っ子体験村」はもちろん、県民大学の移動講座や伊奈町社会科作品展の開催と県南生涯学習センターフェスティバルへの参加等を通して十分検証することができたと考えている。

町内RANのプログラムのため、資料を添付することができないが、伊奈町独自の行政評価システムでも、わくわく元気っ子体験村では、「事業参加率93%」「事業満足率100%」わくわくシリーズに関しては「講座参加率82%」「講座満足率87%」と非常に高い数値を示している。また、その他取り組んだ事業でもアンケートの結果からそれぞれ8割以上の参加率と満足率を達成するという十分な成果を得ることができた。

派遣期間の3年間で、前述のような様々な事業を行い、小中学生やたくさんの町民の方々に参加していただくことができたのは、町教育長飯泉芳郎先生をはじめ、大塚勝美生涯学習課長その他のたくさんの職員の協力のおかげだと感謝している。一つ一つの事業を通して職員の和も深まり、次の事業への意欲の高まりにもつながった。

今後の課題としては、各事業に対する見通しの正確さと募集のあり方が挙げられる。

なかなか人が集まらないものがある一方で、人気のある事業についてはたくさんの希望者がありとても一度では対応できない。かといって回数を増やすことも予算や職員の人数の都合もあり容易ではない。

見通しをもった計画を立て、それに応じた募集をすることが、生涯学習事業を行う際には極めて重要であることを感じた。さらに、学校との連携をこれからもより一層しっかりと図っていくことが必要であると実感した。

学校側が町の事業を利用しやすくなるように早く情報を伝えることや、学社連携さらには学社融合を行うことによってどのような活動が可能であるか、そしてどのような効果が期待できるのかをより具体的に示していく必要もあると考える。その他、今後はさらなる内容の充実と質的向上を図るために、具体的に次の5項目を新たな課題として考えている。

- ①多様な学習機会の提供
- ②学習情報の提供とシステム化
- ③指導者の養成と人材確保
- ④生涯学習の基礎を培う学校教育の充実
- ⑤民間や企業との連携

## 8. 研究のまとめとして

かつて地域には、住民が共同で使用できる「井戸」があり、そこでは人間の生命維持に

最も大切な「水」を介して人々が集まり、同時に強く生きていく上で必要となる「知恵」や「知識」が伝承されてきたという。

しかし現在、私たちは、水道の蛇口をひねれば水が出る便利さを得た代わりに、昔ながらの近所付き合いの中で培われた地域の教育機能を失ってしまった。そのことは家庭・地域の教育力の低下にも直結していると考えられる。

今求められているのは、かつての「井戸」に代えて学校や公民館・図書館など身近な社会教育資源を活用し、多種多様な活動を通して「生きる力」を伝承することではないだろうか。【スプリングプラン】（茨城県社会教育委員会の提案から抜粋）

そのために私たち、学校教育・社会教育に携わる者ができることは、地域と地域・人と人をつなぐコーディネーターとなることではないだろうか。そしてより良いネットワークを作り、子どもたちや地域全体、さらには茨城県全体に貢献できればと思うのである。

現在は、教育委員会から教育の現場である伊奈町立伊奈中学校に復帰し、日々生徒と関わりながら、様々な学習に取り組んでいるところである。その中で、より具体的に、より真摯な気持ちで、これからも生涯学習に関わっていきたいと考えている。



(資料① 赴任した伊奈中学校でも取り組んだ社会科作品展や火おこしの体験学習)